

音韻レベルからみた日韓語の動詞結合

—音韻現象の分析を通して—

李 忠 奎*

(e-mail : ch4229@hanmail.net)

目 次

1. はじめに
 2. 李(2009b)の概観
 3. 日韓語の動詞結合の音韻現象
 - 3.1. 考察のポイント
 - 3.2. 日本語の動詞結合
 - 3.3. 韓国語の動詞結合
 4. 日韓語の動詞結合の音韻現象の対照
 5. まとめ
-

1. はじめに

日本語と韓国語には、例えば、「書いてみる」「食ってかかる」「押し上げる」「밀어 올리다」「써 보다」「오르내리다」などのような、動詞と動詞が結合したものと分析可能な例、すなわち「動詞結合」が豊富に存在する。この数の豊かさは、対照研究を行うためのいい材料として存在意味を発揮するが、これらの例を材料にして対照研究を行う際は、①形態・②音韻・③統語・④意味の4つのレベルから総合的にアプローチする必要があると考えている。

そこで、李(2009b)は、その第一歩として、日韓語の動詞結合を形態レベルで考察し、両言語の動詞結合に関する対照研究においては、「語幹¹⁾」という概念の導入が必要で

* 韓南大学校、時間講師、対照言語学

1) 李(2009a)で規定した通り、日本語では「活用変化しない部分」を、韓国語では「動詞の基本形から最後の{－다}を取り除いた部分」を動詞の「語幹」とする。なお、両言語の動詞の「語幹」を別々の観点から規定

あるということを結論として導き出した。

前稿に引き続き本稿では、日韓語の動詞結合に見られる「音韻現象」について整理する。これは両言語の動詞結合を音韻レベルで考察するものであり、本稿で得られる考察結果は、李(2009b)の主張を音韻レベルからサポートするものとして位置付けられる²⁾。

2. 李(2009b)の概観

本論に入る前に、まず、李(2009b)について簡単に概観しよう。李(2009b)は、前述のように、日韓語の動詞結合を形態レベルで考察したものである。具体的には、V1に「連用形」「語基」「語幹」という概念をそれぞれ適用した場合、どの分析がより妥当であるかを対照言語学的な観点から検討し、結果として「語幹」という概念を適用した分析が日韓語の動詞結合を最もシンプルな形で整理できることを明らかにしている。

「語幹」という概念を適用した観点からでは、日韓語の動詞結合は以下のように一般化することができる。なお、例における「・」は各タイプの境界部を示したものである。

- (1)a. (日) V1の語幹+介在要素+V2 例) 着て・みる
- b. (韓) V1の語幹+介在要素+V2 例) 입어・보다
- (2)a. (日) V1の語幹+V2 例) 集め・始める
- b. (韓) V1の語幹+V2 例) 오르・내리다

ただし、日本語において、V1にいわゆる「子音語幹動詞」が立つ場合は、「日本語では、モーラ音素という例外を除けば、子音のみのモーラが存在し得ない」という形態音韻上の制約により(李(2009a: 34))、子音で終わる語幹の直後に母音「i」を義務的に挿入する(例えば、「押して・みる(o/si/te·mi/ru)」など)。また、「来る」と「する」は語幹が不明確であるということから例外として処理する。

上記のような分析では、日韓語の動詞結合を(1)のような形態構造を有する「介在要素有りタイプ」と(2)のような形態構造を有する「介在要素無しタイプ」に二分できるが、この分析は少なくとも以下の二点の長所を持つ。

- (3)a. 両タイプのV1を同一の用語で統一的に分析することができる。
- b. 介在要素が明示できるようになる。

V1に「語幹」という概念を厳密に適用することによって、結果的に介在要素が明示でき

した理由については李(2009b)を参照されたい。

2) 本稿は、2009年2月に北海道大学に提出した博士学位論文の一部に修正・加筆を加えたものである。

るようになるわけであるが³⁾、このことは日韓語の動詞結合に見られる音韻現象を整理した後、その結果を対照する際に有効に働く。

以上のことを踏まえた上で、以下、具体的な分析に入る。

3. 日韓語の動詞結合の音韻現象

本節では、日韓語の動詞結合に見られる音韻現象を整理する。まず、3.1.では本稿における考察のポイントを提示した後、3.2.では日本語の動詞結合の音韻現象について、3.3.では韓国語の動詞結合の音韻現象についてそれぞれ分析する。

3.1. 考察のポイント

両言語の動詞結合に見られる音韻現象の整理に当たって、本稿の目的上、考察のポイントになるのは、以下の二点である。

- (4)a. どのような音韻現象がどれだけ生じるか。
- b. 該当の音韻現象がどこで生じるか。

(4a)は、要するに、音韻現象の種類と数の調査である。V1と介在要素、または、V1とV2が結合する際に生じる音韻現象の種類と数を「介在要素有りタイプ」と「介在要素無しタイプ」に分けて詳細に分類していく。一方、(4b)は音韻現象の生じる場所を特定しようとするものである。そのために、本稿ではその場所を細かく設定し、「音韻場所⁴⁾」と称することにする。

音韻場所は、境界部を軸として境界部の前の方に二ヶ所を、後ろの方に二ヶ所を設定する。前の方の二ヶ所では、「介在要素の前の部分」と「介在要素」とに区分する。前者を音韻場所①とし、後者を音韻場所②とする。境界部の後ろの方の二ヶ所では、「V2の頭子音」と「その後ろ」とに区分し、前者を音韻場所③とし、後者を音韻場所④とする。

例を挙げて、その場所を具体的に確認してみよう。まず、「介在要素有りタイプ」の例から見てみると、例えば、日本語の「書いてみる」とそれに対応する韓国語の「써 보다 (sseo boda⁵⁾)」の場合、音韻現象の生じる音韻場所は両方とも①となる。

3) 本稿における介在要素の詳しいことについては李(2009b)を参照されたい。

4) 本稿における「音韻場所」とは、本稿の目的上名づけた便宜的な名称である。

5) 分析の必要上、ハングルのローマ字転写をする場合は、「国語のローマ字表記法」(文化観光部告示第2000-8号、第8項)に従う。

【図1】「介在要素有りタイプ」の音韻場所

日：「kaku」	+	{-te}	+	「miru」	→	書いて・みる	(ka ₁ ----t e · m---iru)
韓：「sseuda」	+	{-eo}	+	「boda」	→	써·보다	(ss_---- ø eo · b---oda)
							① ② ③ ④
日：「miru」	+	{-te}	+	「iru」	→	見て・いる	(mi-----t e · ø---iru)
韓：「boda」	+	{-go}	+	「issda」	→	보고·있다	(bo-----g o · ø---issda)

ただし、音韻場所は同じであっても、後述するように、日本語の場合は、一重下線の「母音添加」と二重下線の「子音脱落」が生じるのに対して、韓国語の場合は、「母音脱落」しか生じないという音韻現象の種類において相違が見られる。ちなみに、「見ている」と「보고 있다(bogo issda)」は、本稿の分析では音韻現象が生じないため、音韻場所①～④のどれにも該当しない。

次に、「介在要素無しタイプ」の例を見てみると、例えば、日本語の「割り引く」と韓国語の「여닫다(yeodadda)」の場合、音韻場所は、前者は①(一重下線)と③(二重下線)となり、後者は①(一重下線)となる。

【図2】「介在要素無しタイプ」の音韻場所

日：「waru」	+	「hiku」	→	割り・引く	(war ₁ ----× · <u>b</u> ---iku)
韓：「yeolda」	+	「dadda」	→	여·닫다	(yeo_----× · d---adda)
					① ② ③ ④
日：「ukeru」	+	「ireru」	→	受け・入れる	(uke-----× · ø---ireru)
韓：「muleuda」	+	「igda」	→	무르·익다	(muleu---× · ø---igda)

ちなみに、「受け入れる」と「무르익다(muleu-igda)」は、本稿の分析では音韻現象が生じないため、音韻場所①～④のどれにも該当しない。なお、上記のように音韻場所を設定すると、結果的に「介在要素無しタイプ」は、文字通り介在要素が存在しないため、音韻場所②も存在しないことになる。また両タイプ共に、V2に「いる」「入れる」「있다(issda)」「익다(igda)」などのような母音で始まる動詞が立つ場合は、頭子音がないため、音韻場所③は空(zero)の状態が存在することになる(「ø」で表示)⁶⁾。同様に、韓国語の「介在要素有りタイプ」において、{-아/-어/-여} {-아다/-어다} の場合も頭子音がないため、音韻場所②における頭子音の部分が空(zero)の状

6) 本稿では、動詞結合を考察対象としているため、名詞結合については取り扱わないが、上記の音韻場所の設定を「春(haru)」と「雨(ame)」の結合である「春・雨(haru·same)」にも適用するのであれば、「雨(ame)」が母音で始まるので、音韻場所③は空(zero)の状態であり、そこに子音「s」が添加され、「春・雨(haru·same)」の音韻場所は③になると分析することができる。もちろん、名詞結合の場合は介在要素が存在しないため、上記の設定を修正せずにそのまま名詞結合に適用することは難しいということは承知の上での話である。

態で存在することになる(「 $\emptyset$ 」で表示)。

以上のことを前提にし、以下、日韓語の動詞結合に見られる音韻現象についてより詳細に分析する。

3.2. 日本語の動詞結合

まず、日本語の動詞結合に見られる音韻現象から整理する。なお、整理に当たっては、市川(2005: 58~59)、井上・原田・阿部(1999: 154~177)、工藤他(1993: 185~191)、玉村(1985: 15~17)、林・池上・安藤(2006: 20、45~46、188~189、233~234)、町田・靱山(1995: 48~49)、村崎(1997: 32~35)、森田・村木・相沢(1989: 53~54)、山田(2007: 38~47、67)などを参照した。また、考察対象は基本的に東京方言とする。

3.2.1. 介在要素有りタイプ

前述の具体例「書いてみる」を利用して、本稿における分析の仕方を詳しく見てみよう⁷⁾。

- (5)a. ka/ku(書く)
- b. ka/k_(語幹) (→①母音「i」添加)
- c. ka/ki + {-te}
- d. ka/ki/te (→②子音「k」脱落)
- e. ka/i/te·mi/ru(書いてみる)

「書く(kaku)」という動詞がV1として「介在要素有りタイプ」の動詞結合を形成する場合、第2節の一般化に従って分析すると、まず、(5b)のように「語幹」の形を取る。すると、「書く」が「子音語幹動詞」であるため、2モーラ目が子音のみになり、これは前述の「日本語では、モーラ音素という例外を除けば、子音のみのモーラが存在し得ない」

(李(2009a: 34))という形態音韻上の制約に違反してしまう。そのため、母音「i」が義務的に挿入されることになる⁸⁾。本稿では、これを「母音添加」と分析し、音韻現象の一

7) この際、本稿の目的上、ローマ字(訓令式)表記を導入し、モーラごとに区切りをする。ローマ字(訓令式)表記を導入するのは、「母音添加」とか「子音脱落」といった音韻現象の種類を明示するためであり、モーラごとに区切りをするのは、李(2009a: 34)で主張した日本語の母音「i」が形態音韻上の制約によって義務的に登場するものであることを明確にするためである。また、モーラごとの区切りは、韓国語は「音節言語」であるのに対して、日本語は「モーラ言語」とあるという違いを反映するためでもある。ちなみに、3.3.の韓国語の音韻現象の分析においては、音節ごとに区切りをし、日本語の「モーラ言語」との相違を最大限に生かす。なお、「モーラ言語」vs「音節言語」の指摘については、野間(2007a: 274)を参照されたい。

8) 本来ならば、この際、なぜ「i」という母音が挿入されるのかということについて妥当な説明をすべきであるが、本稿ではそこまでの考察がまだなされていない。筆者は、例えば、「切らない(ki/ra/na/i)」「切ります(ki/ri/ma/su)」「切る(ki/ru)」「切れば(ki/re/ba)」「切ろう(ki/ro/wu)」の内部に見られる太字の母音「a, i, u, e, o」を、例えば、「語幹が否定を表す助動詞と結合する場合は、その境界部に母音「a」を挿

つとして考えることにする⁹⁾。母音「i」が挿入されると、(5c)の、いわゆる「連用形」と呼ばれる「書き(ka/ki)」という形態が作られる。そこに介在要素 {ーて(te)} が後続されて「書きて(ka/ki/te)」となり、そこから2モーラ目の子音「k」が脱落することによって、最終的には「書いて(ka/i/te)」という形態が作られる。いわゆる「イ音便」と呼ばれるものである。V2「みる」は、ここまでの過程が終了した後に後続される。結果的に「書いてみる」は、本稿において「①母音添加」と「②子音脱落」という音韻現象が音韻場所①で生じる例と分析される。

上記の「書いてみる」の場合は、V1が「子音語幹動詞」に属するものであるが、V1が「母音語幹動詞」の場合はどのように分析されるのか。「見ている」と「食べてみる」の二つの例から確認してみよう。

- (6)a. mi/ru(見る)
- b. mi(語幹) (→母音「i」添加不要)
- c. mi + {ーて}
- d. mi/te·i/ru(見ている)
- (7)a. ta/be/ru(食べる)
- b. ta/be(語幹) (→母音「i」添加不要)
- c. ta/be + {ーて}
- d. ta/be/te·mi/ru(食べてみる)

「見ている」と「食べてみる」の場合は、V1「見る」「食べる」が「母音語幹動詞」であるため、(6b)と(7b)の段階で「子音のみのモーラ」という問題が生じない。従って、「子音語幹動詞」の場合に義務的に添加される母音「i」を必要としない。結果的に「見ている」と「食べてみる」は、本稿では音韻現象の生じない例と分析される。

このような分析の仕方で整理していくと、日本語の「介在要素有リタイプ」の動詞結合に見られる音韻現象の種類と音韻場所は、以下のようにまとめることができる。

入せよ」などのような規定を設けて、語幹に後続されるものとして統一的に分析しようとしているが、この分析がどれだけ妥当性を持つのかについてはより綿密な検討を要する。このことについては稿を改めて論じることとする。

9) 語幹に含まれない母音「i」の挿入を「母音添加」として処理することは、筆者の調べた範囲では先行研究ではなされていない分析であるが、注6で言及した「春・雨(haru·same)」が外部から子音「s」が添加された「子音添加」の生じた例として挙げられるように、上記の母音「i」も外部から添加される要素とみなすことができると判断したので「母音添加」と処理した。

【表1】日本語の「介在要素有りタイプ」の音韻現象の種類と音韻場所

	音韻現象過程の簡略化	具体例	音韻現象の種類	音韻場所
①	語幹末C「k」+ {-て} → 「i/te(いて)」	書いてみる	①V添加+②C脱落	㉠
	語幹末C「g」+ {-て} → 「i/de(いで)」	脱いでみる	①V添加+②C脱落	㉠
	語幹末C「k」+ {-て} → 「t/te(って)」	行ってみる	①V添加+②V脱落+③C交替	㉠
	語幹末C「t」+ {-て} → 「t/te(って)」	打ってみる	①V添加+②V脱落	㉠
	語幹末C「r」+ {-て} → 「t/te(って)」	取ってみる	①V添加+②V脱落+③C交替	㉠
	語幹末C「w」+ {-て} → 「t/te(って)」	買ってみる	①V添加+②V脱落+③C交替	㉠
	語幹末C「b」+ {-て} → 「n/de(んで)」	飛んでみる	①V添加+②V脱落+③C交替	㉠
	語幹末C「m」+ {-て} → 「n/de(んで)」	飲んでみる	①V添加+②V脱落+③C交替	㉠
	語幹末C「n」+ {-て} → 「n/de(んで)」	死んでいる	①V添加+②V脱落	㉠
②	語幹末C「s」+ {-て} → 「si/te(して)」	押してみる	①V添加	㉠
	語幹末V「i」+ {-て} → 「~i/te(~いて)」	見ている	該当無し	×
	語幹末V「e」+ {-て} → 「~e/te(~えて)」	食べてみる	該当無し	×

注：「V」は「母音(vowel)」を、「C」は「子音(consonant)」を意味する。また、①はV1が「子音語幹動詞」の場合であり、②はV1が「母音語幹動詞」の場合である。以下、同様。

以上のように整理してみると、日本語の「介在要素有りタイプ」の動詞結合に見られる音韻現象については、少なくとも以下の二点の指摘が可能になる。

- (8)a. V1に「子音語幹動詞」が立つ場合は「母音添加」という音韻現象が生じる。
b. 介在要素の直後では音韻現象が生じない。

後で確認するが、(8a)は「介在要素無しタイプ」にも当てはまり、両タイプの共通点となる。一方、(8b)は「介在要素無しタイプ」には該当しないので両タイプ間に見られる相違点となるが、この指摘は第4節での議論において重要な意味を持つ。

なお、「食べてあげる→食べたげる」「食べておく→食べとく」「食べている→食べてる」「食べていく→食べてく」「食べてしまう→食べちまう→食べちゃう」のようになるのも音韻現象の生じるものとして扱うことができるが、これらは必須的に生じるものではなく、口語で任意的に生じるものなので、(5)の「書いてみる」などの例とは事象のレベルが異なる。従って、本稿ではこの類の例は指摘するにとどめ、考察対象からは除外する。参考までに「食べたげる」は、以下のような過程を経て作られ、音韻現象は「①母音脱落」に該当し、音韻場所は②と分析することができる。なお、「→」で示された必須的に生じる音韻現象と区別するために、(9d)では「⇒」の矢印を導入した。

- (9)a. ta/be/ru(食べる)
b. ta/be(語幹) (→母音「i」添加不要)
c. ta/be + {-te}
d. ta/be/te·a/ge/ru(食べてあげる) (⇒①母音「e」脱落)¹⁰⁾
e. ta/be/ta/ge/ru(食べたげる)

「食べてあげる」が「食べたげる」に縮約すると、結果的に介在要素 {ーて} が消えてしまうので、(8b)の指摘を当てはめることができなくなる。また、「食べてあげる」は「食べてはあげるけど」のような操作が可能ことから境界部の保持が確認できるが、縮約形の「食べたげる」は、「*食べはたげるけど」「*食べたはげるけど」の操作が不可能なことから分かるように、介在要素 {ーて} が消失することによって境界部もなくなる¹¹⁾。

3.2.2. 介在要素無しタイプ

上記と同じ仕方で、例えば、「掻く」と「出す」の結合である「掻い出す」がどのような過程を経て形成されるのか見てみよう。

- (10)a. ka/ku(掻く)
- b. ka/k_(語幹) (→①母音「i」添加)
- c. ka/ki+da/su(出す)
- d. ka/ki·da/su(掻き出す) (→②子音「k」脱落)
- e. ka/i·da/su(掻い出す)

(10)を見てみると、(10b)の段階で「母音添加」が生じ、その後、(10d)の「掻き出す(ka/ki·da/su)」から「子音脱落」が生じることが分かる。すると、「①母音添加+②子音脱落」に該当し、音韻場所は①となる。「掻い潜る(←掻き潜る)」「掻い繰(く)る(←掻き繰(く)る)」「掻い込む(←掻き込む)」などが同じ分析の可能な例として挙げられる。ちなみに、「掻い繰(く)る」の場合は「掻い繰(ぐ)る」とも言い(『大辞泉』)、すると、「掻い繰(ぐ)る」は、V2の頭子音にいわゆる「連濁」という「子音交替」の現象が追加され、音韻現象の種類と場所は「①母音添加+②子音脱落+③子音交替」の①と③となる。

もう1つの例を見てみよう。(11)は「連れる」と「立つ」が介在要素を挟まずに最終的に「連れ立(だ)つ」を作り出す過程を示したものである。

- (11)a. tu/re/ru(連れる)
- b. tu/re(語幹) (→母音「i」添加不要)
- c. tu/re + ta/tu(立つ)
- d. tu/re·ta/tu(連れ立(た)つ) (→①子音「t」交替)

10) 「食べてあげる→食べたげる」「食べておく→食べとく」「食べている→食べてる」「食べていく→食べてく」では、「tabete·ageru」「tabete·oku」「tabete·iru」「tabete·iku」のように、それぞれ境界部直前・境界部直後で母音が脱落するとも言えるが、境界を挟んで母音が接触する状態(in-boundary diphthong)において、前舌より奥舌、狭口より広口が優先されて保持され、もう一方が消去されるとみられることもできる。なお、この指摘は、指導教官である北海道大学大学院文学研究科の加藤重広教授からいただいたものである。この場を借りてお礼を申し上げたい。

11) この指摘については、加藤(2007: 149)も参照されたい。

e. tu/re·da/tu(連れ立(だ)つ)

(11)を見てみると、V1「連れる」が「母音語幹動詞」であるため、(11b)の段階で「母音添加」が生じず、(11d)の「連れ立(た)つ(tu/re/ta/tu)」が(11e)の「連れ立(だ)つ(tu/re/da/tu)」に変わる段階で「子音交替」が生じることが確認できる。いわゆる「連濁」と呼ばれる現象である。音韻現象は「①子音交替」に該当し、音韻場所は③と整理することができる。以下のようなものが同じ分析の可能な例として挙げられる。V2の頭子音がどのように交替するか、種類別に分けて示す。V1が「母音語幹動詞」であることを確認されたい。

(12)a. t → d : 生け捕(ど)る、そそけ立(だ)つ、群れ立(だ)つ

b. h → b : 老い耄(ぼ)れる、着膨(ふく)れる、出張(ば)る

c. k → g : 着替(が)える、寝返(がえ)る、痩せ枯(が)れる

d. s → z : 寝覚(ざ)める、干反(ぞ)る

ちなみに、(12)の例のうち、「着替(が)える」「寝返(がえ)る」「出張(ば)る」は、それぞれ「着替(か)える」「寝返(かえ)る」「出張(は)る」とも言う(『大辞泉』)。すると、後者の場合は、音韻現象の生じない例と分類される。

以上のような分析の仕方で整理していくと、日本語の「介在要素無しタイプ」の動詞結合に見られる音韻現象の種類と音韻場所は、以下のようにまとめることができる。なお、「介在要素無しタイプ」に見られる音韻現象は、「介在要素有りタイプ」のように、規則的に整理することが難しい面があり、【表2】では【表1】の「音韻現象過程の簡略化」が成されていない。

【表2】日本語の「介在要素無しタイプ」の音韻現象の種類と音韻場所

	具体例	音韻現象の種類	音韻場所
①	立ち止(と)まる	①V添加	①
	抜きん出る	①V添加+②C添加	①
	掻い出す	①V添加+②C脱落	①
	引っ込む	①V添加+②V脱落	①
	打(ぶ)ん殴る	①V添加+②V脱落+③C交替	①
	割り引(び)く	①V添加+②C交替	①と③
	掻い繰(ぐ)る	①V添加+②C脱落+③C交替	①と③
	踏ん張(ば)る	①V添加+②V脱落+③C交替+④C交替	①と③
②	混ぜっ返す	①C添加	①
	出っ張(ば)る	①C交替+②C添加+③C交替	①と③
	連れ立(だ)つ	①C交替	③

以上のように整理してみると、日本語の「介在要素無しタイプ」の動詞結合において

も、V1に「子音語幹動詞」が立つ場合は「母音添加」という音韻現象が生じ、「介在要素有りタイプ」の場合と共通するのがまず確認できる。

【表2】において、本稿が最も注目するのは、音韻場所③においても音韻現象が生じ得るという点である。音韻場所③はV2の「頭子音」の所を指すが、「介在要素無しタイプ」の場合は、この場所で音韻現象の生じる場合があるのである。【表1】で見たように「介在要素有りタイプ」の場合は、音韻場所③に該当する「介在要素の直後」では音韻現象が生じないため、音韻場所③で音韻現象が生じ得るかどうかなどということは、両タイプの音韻現象を比較する際に重要なポイントになる。

ではなぜ、音韻場所③で音韻現象が生じ得るかどうかなどという点に注目しているのか、これについては、次節で韓国語の動詞結合に見られる音韻現象を整理した後、第4節で詳細に言及することにする。

3.3. 韓国語の動詞結合

次に、韓国語の動詞結合に見られる音韻現象について整理する。なお、整理に当たっては、김계곤(1996: 474~486)、김승곤(2003: 5~17, 485~495)、野間(2007b)、村崎(1997: 38)、신지영·차재은(2004: 175~310)、이관규(2002: 90~106, 160~165)、李·李·蔡(2004: 69~90)、이진호(2005: 117~165)、이호영(1996: 133~191)、최길시(1998)などを参考にした。

3.3.1. 介在要素有りタイプ

前述の具体例「써 보다(sseo boda)」を利用して、日本語の場合と同じ仕方で分析する。参考までに、「써 보다(sseo boda)」と対応する「書いてみる」の形成過程を右側に示しておく。なお、韓国語の区切りは音節ごとにする(注7を参照)。

- | | |
|--------------------------|---------------------------------|
| (13)a. sseu/da(쓰다) | ／ ka/ku(書く) |
| | ／ ka/k_(語幹) (→①母音「i」添加) |
| b. sseu(語幹) + {-eo} | ／ ka/ki + {-te} |
| c. sseu/-eo (→①母音「eu」脱落) | ／ ka/ <u>ki</u> /te (→②子音「k」脱落) |
| d. sseo·bo/da(써 보다) | ／ ka/i/te·mi/ru(書いてみる) |

「쓰다(sseuda)」という動詞がV1として動詞結合を形成する際に、まず、(13b)のように「語幹」の形式を取る。最初の段階で「語幹」の形式を取るという点は日本語と同様である。ただ、日本語の方は、今まで見てきた通り、語幹が子音終わりであるか否かによって「母音添加」の有無が決まるが、韓国語の場合は、本稿の考察範囲に限っては「母音添加」の有無を考える必要がない(第4節を参照)。次に、語幹が陰母音「으

「eu)」で終わるため、{-어(eo)} が介在要素として選択され、この二つが結合すると、(13c)の「쓰어(sseu-eo)」という形が作られる。日本語の「書き(ka/ki)」と{-て(te)} が結合して「書いて(ka/ki/te)」を作る過程と類似する。ただし、日本語の{-て(te)} は語幹末子音の種類によって選択されるが、韓国語の{-어(eo)} は語幹末母音の種類によって選択されるという違いはある。最後に、日本語の「書いて」がそのままの形では用いられず、音韻現象によって「書いて」となるように、韓国語の「쓰어(sseu-eo)」もそのままの形では用いられず、音韻現象を起こす。その際の音韻現象が「으(eu)」脱落なのである。いわゆる「『으(eu)』脱落現象」と呼ばれるものである。結果的に、(13d)の「써(sseo)」から分かるように、音節数が一つ減ることになる。「書いてみる」が「①母音添加+②子音脱落」に該当するのに対して、それに対応する「써 보다(sseo boda)」は「①母音脱落」に該当する。音韻場所は両方とも①である。

上記の「써 보다(sseo boda)」は、表記を見ればどういう音韻現象が生じたのかということが特定できるが、例の中には表記のみでは音韻現象の種類が特定できないものもある。音韻現象が音声レベルで生じ、それが表記に反映されないからである。

(14)a. ssah/da(쌔다)

- b. ssah(語幹) + {-a}
- c. ssah/-a (→①音声上、子音「h」脱落)
- d. ssah/-a[ssa/-a]·bo/da(쌔아[싸아] 보다)

(14)は「쌔다(ssahda)」が介在要素{-아(a)}を挟んで「보다(boda)」と結合する過程を示したものであるが、語幹末子音「ㅎ(h)」が介在要素{-아(a)}と結合する際に音声レベルで脱落するのが分かる。結果的に、表記上の「쌔아(ssah-a)」が[싸아(ssa-a)]と発音される。音声レベルではあるものの、これも必須的に生じる音韻現象の一種なので本稿の整理の対象となる。例の「쌔아 보다(ssah-a boda)」は、音声レベルにおける「①子音脱落」に該当し、音韻場所は①と分析することができる。

以上のような分析の仕方で整理していくと、韓国語の「介在要素有りタイプ」の動詞結合に見られる音韻現象の種類と音韻場所は、以下のようにまとめることができる。

【表3】韓国語の「介在要素有りタイプ」の音韻現象の種類と音韻場所

	音韻現象過程の簡略化	具体例	音韻現象の種類	音韻場所
①	語幹末C「ㄴ」+ {-아} → 「아」	(실을) 자아내다	①C脱落	①
	語幹末C「ㄴ」+ {-어} → 「어」	이어주다	①C脱落	①
	語幹末C「ㄷ」+ {-아} → 「ㄹ아」	깨달아 가다	①C交替	①
	語幹末C「ㄷ」+ {-어} → 「ㄹ어」	걸어 보다	①C交替	①
	語幹末C「ㅌ」+ {-아} → 「와」	도와 주다	①CからVへの転換+②V融合	①と②
	語幹末C「ㅌ」+ {-어} → 「워」	구워 먹다	①CからVへの転換+②V融合	①と②
	語幹末C「ㅎ」+ {-아} → [아] ¹²⁾	쌔아[싸아] 보다	①C脱落(音声)	①
	語幹末C「ㅎ」+ {-어} → [어] ¹³⁾	넣어[너어] 두다	①C脱落(音声)	①

②	語幹末C「ㄱ」+ {-고} → [ㄱ코] ¹⁴⁾	먹고[먹코] 가다	①C交替(音声)	㉑
	語幹末C「ㄴ」+ {-고} → [ㄴ코] ¹⁵⁾	웃고[온코] 있다	①C交替(音声)+②C交替(音声)	㉑と㉒
	語幹末C「ㄷ」+ {-고} → [ㄷ코]	감고[갑코] 있다	①C交替(音声)+②C交替(音声)	㉑と㉒
	語幹末C「ㄹ」+ {-고} → [ㄹ코]	겪고[격코] 있다	①C交替(音声)+②C交替(音声)	㉑と㉒
	語幹末C「ㄷ」+ {-고} → [ㄷ코] ¹⁶⁾	삼고[삼코] 있다	①C脱落(音声)+②C交替(音声)	㉑と㉒
	語幹末C「ㄷ」+ {-고} → [ㄷ코]	울고[읍코] 있다	①C脱落(音声)+②C交替(音声) +③C交替(音声)	㉑と㉒
	語幹末C「ㄷ」+ {-고} → [ㄷ코]	알고[알코] 있다	①C融合(音声)	㉑と㉒
	語幹末V「으」+ {-어} → 「어」	써 보다	①V脱落	㉑
	語幹末V「으」+ {-어} → 「아」	답가 두다	①V脱落+②V交替	㉑と㉒
	語幹末V「우」+ {-어} → 「어」	퍼 주다	①V脱落	㉑
	語幹末V「아」+ {-아} → 「아」	가 보다	①V脱落	㉑
	語幹末V「어」+ {-어} → 「어」	서 있다	①V脱落	㉑
	語幹末V「에」+ {-어} → 「에」	깨나다	①V脱落(任意的) ¹⁷⁾	㉑
	語幹末V「에」+ {-어} → 「에」	메꽃다	①V脱落(任意的)	㉑
	語幹末V「이」+ {-어} → 「여」	달려 오다	①V融合	㉑と㉒
	語幹末V「오」+ {-아} → 「와」	와 버리다	①V融合	㉑と㉒
	語幹末V「우」+ {-어} → 「워」	배워 두다	①V融合	㉑と㉒
	語幹末V「외」+ {-어} → 「웨」	돼 가다	①V融合(任意的)	㉑と㉒
	語幹末音節「르」+ {-어} → 「르러」	흘러가다	①V脱落+②C添加	㉑と㉒
	語幹末音節「르」+ {-어} → 「르라」	갈라 놓다	①V脱落+②C添加+③V交替	㉑と㉒
	語幹末音節「르」+ {-어} → 「르러」	이르러 쉬다	①C添加	㉑
	語幹末音節「지」+ {-어} → 「지」 ¹⁸⁾	가져[가져] 오다	①V融合+②半V脱落(音声)	㉑と㉒

以上のように整理して見てみると、「介在要素が {-고} である場合に該当する音韻現象は全てが音声レベルで生じ、その結果は表記に反映されない」とか「介在要素が {-아／-어} である場合に該当する音韻現象は大部分が表記に反映されるものであるが、表記に反映されない音声レベルで生じるものも一部存在する」などの特徴を見出せる

12) ここでは、語幹末子音「ㅎ」以外に、語幹末子音「ㄷ」も含まれる。ただし、残り子音「ㄷ」は後続音節の頭子音になる(例: 알아[아라]놓다)。なお、残り子音「ㄷ」が後続音節の頭子音になるのも厳密に言えば「連音法則」という音韻現象の一種であるが、添加や脱落、または交替と異なって、元々そこにあるものが単純に移動することなので、本稿では音韻現象の種類として扱わない。ちなみに「連音法則」とは、例えば、「꽃이」が [꼬치] と発音されるように、「終声字のある文字の後ろに○で始まる文字が続いて、先行の終声字が後続音節の初声として発音される現象」(『朝鮮語辞典』(1993: 1298))である。

13) ここでは、語幹末子音「ㅎ」以外に、語幹末子音「ㄷ、ㄴ」も含まれる。ただし、残り子音「ㄷ、ㄴ」は後続音節の頭子音になる(例: 뚫어[뚜리] 놓다, 끓어[끄너] 보다)。

14) ここでは、語幹末子音「ㄱ」以外に、語幹末子音「ㄴ、ㄷ、ㄹ、ㄷ」も含まれる。

例) 신고[신코] 있다, 담고[담코] 있다, 감고[갑코] 있다, 업고[업코] 있다

15) ここでは、語幹末子音「ㄴ」以外に、語幹末子音「ㄴ、ㄴ、ㄴ、ㄴ」も含まれる。

例) 있고[일코] 보다, 잊고[일코] 있다, 쫓고[쫓코] 있다, 말라붙고[붙코] 있다

16) ここでは、語幹末子音「ㄷ」以外に、語幹末子音「ㄷ、ㄴ、ㄷ、ㄷ」も含まれる。このうち、「ㄷ、ㄷ」は前の子音「ㄷ」が脱落し、「ㄴ、ㄷ、ㄷ」は後ろの子音「ㄴ、ㄱ、ㄴ」が脱落する。

例) 밝고[밥코] 있다, 엇고[연코] 있다, 굵고[글코] 있다, 활고[할코] 있다

17) これは「깨어나다」の形態が用いられることから分かるように、必須的に生じるものではなく、任意的に生じるものなので、日本語の「食べたげる」「食べとく」と同じように考察外とするのが一貫した処置になるが、日本語のように、口語でしか生じないという制約はないため、考察範囲から除外することはしなかった。

18) ここでは、活用の結果生じた「쳐、찌」が [쳐, 찌] と発音されるものも含まれる。

例) 고쳐[고쳐] 주다, 찌[찌] 주다

が、本稿でより注目するのは、音韻場所③で音韻現象の生じる例が存在しないという点である。前述したように、音韻場所③はV2の「頭子音」の所であり、環境としては「介在要素の直後」に該当する。結論として、韓国語の「介在要素有りタイプ」においても日本語の「介在要素有りタイプ」の場合と同様、介在要素の直後では音韻現象が生じない。

3.3.2. 介在要素無しタイプ

韓国語の「介在要素無しタイプ」はその数が少ない。従って、そこに見られる音韻現象の種類も多くない。このことをまず踏まえた上で、以下、日本語の場合と同じく整理する。

(15)は「열다(yeolda)」と「닫다(dadda)」が介在要素を挟まずに「여닫다(yeodadda)」を作り出す過程を示したものである。

- (15)a. yeol/da(열다)
- b. yeol(語幹) + dad/da(닫다)
- c. yeol·dad/da (→①子音「l」脱落)
- d. yeo·dad/da(여·닫다)

(15c・d)を見てみると、V1の語幹末子音「ㄹ(l)」が脱落することが分かる。すると、音韻現象の種類は「①子音脱落」に該当し、音韻場所は①と整理することができる。

もう1つの例を見てみよう。(16)は「붙다(butda)」と「잡다(jabda)」が介在要素を挟まずに「붙잡다(butjabda)」を作り出す過程を示したものである。

- (16)a. but/da(붙다)
- b. but(語幹) + jab/da(잡다)
- c. but·jab/da (→①音声上、子音「t」交替、②音声上、子音「j」交替)
- d. but·jab/da[bud·jjab/tta](붙·잡다[붙·잡따])

(16c・d)を見てみると、語幹末子音「ㄷ(t)」が「ㄷ(d)」と発音され、V2の頭子音「ㅈ(j)」が「ㅈ(jj)」と発音されるのが分かる¹⁹⁾。前者はいわゆる「不破化現象²⁰⁾」に

19) 第3音節の頭子音「ㄷ(d)」が「ㄷ(t)」と発音されるのも音声上における「子音交替」に該当するが、この場合の子音交替は、動詞結合の形成には直接関わらないため、つまり、動詞結合を形成する際に生じるものではなく、動詞自体の内部(잡/다[잡/따])で生じるもので、本稿における音韻現象の種類としてはカウントしない。

20) 参考までに、李・李・蔡(2004: 77~78)の指摘を補足説明として付け加えておく。

音節末の不破化によって音節末で実現される子音の数は7個に過ぎない。ㄱ(k)、ㄴ(n)、ㄷ(d)、ㄹ(l)、ㅁ(m)、ㅂ(b)、ㅇ(ng)がそれである。したがって残りの子音は、この7個の子音のうちのいずれかの子音に変わる他ない(引用者注: 7個の子音のうち、ㄷ(d)とㅂ(b)のローマ字は、採用したローマ字表記法が一致していないため、原文のㄷ(t)とㅂ(p)と異なっている)。

実際、音節末で残りの子音がどのように変わるかを整理すると、以下のようになる(油谷(2005: 21))。

①ㄱ(kk)、ㄴ(gs)、ㅋ(k)、ㄹ(lg) → ㄱ(g)

よるものであり、後者はいわゆる「濃音化現象(硬音化現象)」と呼ばれるものであるが、いずれも音声レベルにおいて子音が交替したものである。「①子音交替(音声)+②子音交替(音声)」の音韻場所「①と③」と整理することができる。

以上のような仕方では、韓国語の「介在要素無しタイプ」の動詞結合に見られる音韻現象の種類と音韻場所を整理すると、以下のようにまとめることができる。なお、V1が母音語幹動詞である場合の具体例はまだ見つけていないので、便宜上、「—」で示しておく。

【表4】韓国語の「介在要素無しタイプ」の音韻現象の種類と音韻場所

	具体例	音韻現象の種類	音韻場所
①	여닫다	①C脱落	①
	굽[꺾]주리다	①C脱落(音声)	①
	엮[엮]매다	①C脱落(音声)+②C交替(音声)	①
	붙잡[붙잡]다	①C交替(音声)+②C交替(音声)	①と③
	반돌[뒹]다	①C交替(音声)	③
	울부짖다 ²¹⁾	①音節脱落	④
②	—	—	—

以上のように整理してみると、音声レベルで音韻現象の生じる例が多いことが確認できるが、先の「介在要素有りタイプ」との比較という観点からみると、音韻場所③の存在が重要な意味を持つ。「介在要素無しタイプ」の中には、例は少ないものの、「介在要素有りタイプ」ならば「介在要素の直後」に該当する音韻場所③で音韻現象の生じる例が存在するのであり、この点は日本語の「介在要素無しタイプ」の場合と共通する。

以上、本節では、日韓語の動詞結合に見られる音韻現象について整理した。次節では、本節の考察結果を対照し、本稿の主張を明確にする。

②ㄴ(nj)、ㄴh(nh) → ㄴ(n)

③ㅅ(s)、ㅆ(ss)、ㅈ(j)、ㅊ(ch)、ㅌ(t)、ㅎ(h) → ㄷ(d)

④ㄹ(lg)、ㄹb(lb)、ㄹl(ls)、ㄹt(lt)、ㄹh(lh) → ㄹ(l)

⑤ㄹm(lm) → ㄹ(m)

⑥ㄹb(lb)、ㄹp(lp)、ㅂ(bs)、ㅍ(p) → ㅂ(b)

⑦ㅇ(ng) → ㅇ(ng)

このうち、「ㄹ」を語幹末子音とする用言は、つではじまる語尾がついたときだけ[ㄹ]と読むので要注意(菅野・浜之上・権(2007:45))である(읽고[일꼬]／읽다[익따])。また、「ㄹb(lb)」を語幹末子音として持つ「밟다」についてであるが、本稿では「ㄹb(lb)」→[ㅂ(b)](밟고[밥꼬])と分析したが、実際には「ㄹb(lb)」→[ㄹ(l)](밟고[발꼬])のように発音する話者もいることを付け加えておく(이호영(1996:144~145)、油谷(2005:21))。

21) 『표준국어대사전』には、「울부짖다」が「여-닫다」のように「울-부짖다」の形で収録されているのではなく、「건드리다」のように「울부짖다」の形で収録されている。つまり、「-」の表示がなされていないのである。このことは「울부짖다」が「動詞結合」ではなく、「건드리다」と同様に「單純語」である可能性を示唆する。しかし、意味を考慮すると、「울부짖다」は「울다」と「부르짖다」の結合であると考えられるので、本稿では「動詞結合」として扱った。塚本(1993:229~230)と『朝鮮語辞典』(1993:1376)も参照されたい。

4. 日韓語の動詞結合の音韻現象の対照

本節では、前節のそれぞれの考察結果を対照するという形で整理し直し、そこに見られる全体的な傾向を確認した後、上記のような仕方で分析することによって何が言えるのかということについて論じる。

【表5】は、前節の日韓語の「介在要素有りタイプ」の考察結果を整理し直したものである。

【表5】日韓語の「介在要素有りタイプ」の音韻現象の種類と音韻場所の対照

音韻場所	日本語 音韻現象の種類と具体例	韓国語 音韻現象の種類と具体例
①	①V添加：押してみる ①V添加+②V脱落：打ってみる ①V添加+②C脱落：書いてみる ①V添加+②V脱落+③C交替：行ってみる	①V脱落：씨 보다 ①C脱落：자아내다 ①C脱落(音)：쌍아[싸아] 보다 ①C交替：깨달아 가다
①と②	該当無し	①V脱落+②V交替：담가 두다 ①V脱落+②C添加：흘러가다 ①V脱落+②C添加+③V交替：갈라 놓다 ①V融合：달려오다 ①V融合：왜가다(任意的) ①CからVへの転換+②V融合：도와 주다 ①V融合+②半V脱落(音)：가져[가저] 오다 ①C交替(音)+②C交替(音)：웃고[웁꼬] 있다 ①C脱落(音)+②C交替(音)+③C交替(音)：울고[웁꼬] 있다 ①C融合(音)：알고[알꼬] 있다
②	該当無し	①V脱落：깨내다(任意的) ①C添加：이르러 쉬다 ①C交替(音)：먹고[먹꼬] 가다

そして、【表6】は、前節の日韓語の「介在要素無しタイプ」の考察結果を整理し直したものである。

【表6】日韓語の「介在要素無しタイプ」の音韻現象の種類と音韻場所の対照

音韻場所	日本語 音韻現象の種類と具体例	韓国語 音韻現象の種類と具体例
①	①V添加：立ち止(と)まる ①V添加+②C添加：抜きん出る ①V添加+②C脱落：掻い出す ①V添加+②V脱落：引っ込む ①V添加+②V脱落+③C交替：打(ぶ)ん殴る ①C添加：混ぜり返す	①C脱落：여닫다 ①C脱落(音)：굴[굴]주리다 ①C脱落(音)+②C交替(音)：엎[엳]매다
①と③	①V添加+②C交替：割り引(び)く	①C交替(音)+②C交替(音)：붙잡[분잡]다

	①V添加+②C脱落+③C交替：掻い繰(く)る ①V添加+②V脱落+③C交替+④C交替： 踏ん張(ば)る	
	①C交替+②C添加+③C交替：出っ張(ば)る	—
③	①C交替：連れ立(だ)つ	①C交替(音)：받들[뜰]다
④	—	①音節脱落：울부짖다

【表5】と【表6】のように整理し直して見てみると、全体的な傾向として、「介在要素有りタイプ」は韓国語の方が音韻現象の種類が多く複雑なのに対して、「介在要素無しタイプ」は日本語の方が音韻現象の種類が多く複雑であるということが確認できる。これは、両タイプが両言語間で数の違いを見せるということから起因するものと考えられる。つまり、「介在要素有りタイプ」の場合は、介在要素の数の違いから韓国語の方がより多様な音韻現象が見られると言える。音韻現象に関わる介在要素として日本語には {ーて} {ーで} があり、韓国語には {ー아} {ー어} {ー고} があるが、数としてはたった2対3のこの違いが数多くのV1と結合する過程で相対的に音韻現象の種類に差を生じさせる原因となるのである。また、「介在要素無しタイプ」の場合は、李(2009a)の指摘通り、韓国語より日本語の方が圧倒的にその数が多いため、日本語に多様な音韻現象が見られることは、ある意味当然の結果と言えよう。ちなみに、李(2009a)は、両言語間の「介在要素無しタイプ」において数の差が生じる根本的な原因は、動詞の「語幹の自立度の差」によるものと主張している。

さて、上記のように分析することによって、本稿で特に指摘したいことは次の二点である。

一点目は、日本語では、V1に「子音語幹動詞」が立つ場合はタイプを問わずに「母音添加」という常に生じる音韻現象が存在するのに対して、韓国語では、動詞結合の形成においてそのような音韻現象は存在しないということである。V1に「語幹」という概念を厳密に適用した場合、語幹に属さない母音「i」の問題が日本語の限定された場合にだけ生じ、その母音「i」の存在を本稿では「母音添加」として処理したのであるが、韓国語ではこの類の現象は見られない。ただし、この指摘はあくまでも考察範囲を本稿のように限定した場合に限って有効であり、より広い範囲で観察を行えば、韓国語においても日本語の母音「i」と似た働きをする要素が存在することが分かる。韓国語の母音「으」がそれである。

- (17)a. 먹으려 간다./참으려 했다./웃으며 왔다./남으면 준다.
b. 자러 간다./가려 했다./보며 왔다./오면 준다.

(17)を見てみると、{ー러} {ー려} {ー며} {ー면} がそれぞれ「먹다」「참다」「웃다」「남다」のような子音語幹動詞と結合する際は母音「으」を必要とする

が、「자다」「가다」「보다」「오다」のような母音語幹動詞と結合する際は母音「으」を必要としないということが確認できる。このように韓国語においても子音語幹動詞の場合だけに登場する母音が存在するのである。しかし、本稿では、(17)のような例を考察対象から除外しているため(注3、李(2009b))、本稿の考察対象を分析する過程では「으」という母音が前面に出てくることはない。従って、韓国語の母音「으」と日本語の母音「i」とを1対1で対応させることは困難である。しかも、韓国語の母音「으」は、例えば、「놀러 간다」「끌려 했다」「울며 왔다」「알면 준다」などの例から分かるように、「놀다」「끌다」「울다」「알다」のような語幹末子音が「ㄴ」である場合は現れないため、子音語幹動詞であってもその登場に制約を受ける場合があり²²⁾、このような制約のない日本語の母音「i」と同様に扱うのはやはり難しい面がある。従って本稿では、韓国語の母音「으」の存在を指摘はするが、日本語の母音「i」と1対1の対応はさせない。

二点目は、日韓語共に、介在要素の直後では音韻現象が生じないということである。これは本稿の最も重要な指摘になるので、3.1.で設定した音韻場所をもう一度確認しながら、より詳しく見てみることにする。

【図1】「介在要素有りタイプ」の音韻場所

日：「kaku」	+	{-te}	+	「miru」	→	書いて・みる	(ka _i ----t e · m---iru)
韓：「sseuda」	+	{-eo}	+	「boda」	→	써·보다	(ss_---- ø eo · b---oda)
						① ② ③ ④	
日：「miru」	+	{-te}	+	「iru」	→	見て・いる	(mi-----t e · ø---iru)
韓：「boda」	+	{-go}	+	「issda」	→	보고·있다	(bo-----g o · ø---issda)

図を見れば分かるように、「介在要素の直後」は音韻場所が③として設定されており、以下のように二つの場合に分かれる。

- (18)a. 音韻場所③に子音が存在する場合
b. 音韻場所③が空の状態である場合

二点目の指摘は、この二つの場合のいずれにも音韻現象が生じないということである。

22) 参考までに、韓国語の「으」という要素に関する『연세한국어사전』(1998:1424)の記述を挙げておく。
·조음소. ‘ㄴ’을 제외한 받침 있는 어간 다음에서, 받침 있는 어미가 이어질 때, 받침의 편의를 위하여 들어가는 말. 『읽으며/먹으려고/굶으면/좋으려면』.
·‘-자면, -든지, -듯이’ 등의 어미 앞에서는 ‘-으-’가 쓰이지 않음. 『있자면/먹든지/읽듯이』.
·어미 ‘-되’는 ‘있다, 없다’의 어간 아래와 ‘-았-, -겠-’ 아래에서만 ‘-으-’가 나타난다. 『먹되/있되/없되/먹었되』.

(18a)の場合、生じ得る代表的な音韻現象として「子音交替」が考えられるが、介在要素の直後ではそれがブロッキングされる。「子音交替」以外の可能性としては「子音脱落」が挙げられるが、これも介在要素の直後ではブロッキングされる。(18b)の場合も同様で、「子音添加」が生じ得る音韻現象として考えられるが、それが実際に生じる動詞結合の例は見当たらない。このように介在要素の直後では、可能性として考えられる音韻現象が制約を受け、生じないのである。言い換えれば、介在要素が音韻現象を阻止する一種の制約装置として機能するとも解釈できよう。

では、なぜ、介在要素の直後では音韻現象が生じないのか。その理由は簡単で、介在要素が存在することによって、その直後で切れ目が生じるからである。介在要素の直後では一旦ひと区切りがつくというわけである。ひと区切りがつくということは、その後ろが新しく出発することでもある。新しく出発する場所で、すなわち、最初に発音されるところでいきなり音韻現象が生じるのは自然ではない²³⁾。介在要素の直後で音韻現象が生じないのはそのためであると考えられる。

既に指摘したように、二点目の指摘は「介在要素無しタイプ」には該当しない。言うまでもなく、介在要素が存在しないことから、「介在要素の直後では」という指摘ができないからである。実際、「介在要素無しタイプ」には介在要素の直後ではブロッキングされた音韻現象が制約を受けずに観察される。その代表的なのが「子音交替」である。

(19)a. 連れ立(だ)つ(t→d)、着膨(ふく)れる(h→b)、着替(が)える(k→g)、…

b. 追っ払(ばら)う(h→p)、突っ走(ばし)る(h→p)、酔っ払(ばら)う(h→p)、…

(20) 받들([뜰])다(d→[tt])、붙박([뻥])다(b→[pp])、붙잡([죵])다(j→[jj])、…

(19a・b)は、それぞれいわゆる「連濁現象²⁴⁾」「半濁音現象」の生じる例であり、

23) 韓国語において「과사무실」を [과사무실] と発音する場合があるが、これは韓国語の標準語規定(第2部「標準発音法」)の第6章の「경음화」第23項～第28項)に定められていない不必要な濃音化現象である。他に「달리」を [탈리]、「버스」を [뽀스]、「다른 일」を [따른 일] と発音するのも同様である。

24) 日本語の「介在要素無しタイプ」に見られる「連濁現象」について、松本(1998: 50)に興味深い指摘があるので、以下に引用して検討する(例の挙げ方に引用者による若干の修正あり)。

(原文(16)の例として「着膨(ふく)れる」「食い倒(だお)れる」「飲み倒(だお)れる」を挙げた後) これらは、動詞の複合によって直接作られたものではない可能性がある。そう考える根拠の一つは、音韻的なものである。複合によってV-V動詞を作る際、後項の語頭子音は一般に連濁を起こさない(Sugioka1984などを参照)。ところが、(16)で連濁が起こっている(原文では、ここで「注7」がついている。本稿では以下に引用する)。このような連濁は、動詞の複合によってV-V名詞を作る際は、「読み答(ごた)え」「変わり栄(ば)え」「つかみ取(ど)り」などのように一般に起こることが知られている(ただし、「売り買(かい)」「見聞(き)き」「貸し借(かり)」など二つの動詞が等位的な関係にある場合は除く)。このことから、(16)は「着膨(ふく)れ」「食い倒(だお)れ」「飲み倒(だお)れ」という名詞から派生したものとも考えられる。

(注7)このような例外には他に「生け捕(ど)る」「返り咲(ぎ)く」「待ち伏(ぶ)せる」「寝返(が)える」「寝覚(ざ)める」「着替(が)える」などがあるが、いずれも対応するV-V名詞が一般的に使われ、意味的にもV-V動詞の一般的なパターンから外れているものがほとんどである。この意味でV-V名詞が動詞化したものとする

(20)は、いわゆる「濃音化現象」の生じる例であるが、いずれも「子音交替」に該当する。この「子音交替」が「介在要素有りタイプ」なら「介在要素の直後」に該当する場所で生じるのである。(19)と(20)のような音韻現象は、日韓語共に「介在要素有りタイプ」では生じない。

このように、日韓語共に「介在要素有りタイプ」と「介在要素無しタイプ」とでは、本稿で音韻場所③として設定した所で「子音交替」が生じ得るかどう点において相違が見られることが指摘できる。この相違を説明するために、本稿では「介在要素の直後では」という表現を用いており、この表現は介在要素が明示されているからこそ可能なものである。李(2009b)は、V1に「連用形」「語基」という用語をそれぞれ適用して分析する研究と「語幹」という概念を厳密に適用して分析する研究とを比較しながら、後者の長所として「介在要素が明示できる」ということを指摘したが、それを長所としたのは今問題になっている相違が適切に説明できるからである。

【表7】具体例の音韻現象に対する「連用形」「語基」「語幹」を利用・適用した分析(李(2009b: 113)²⁵⁾)

具体例	音韻現象	「連用形」を適用する分析	「語基」を適用する分析	「語幹」を適用する分析
見て取る	無し	V1の連用形+介在要素+V2	V1の語基+介在要素+V2	V1の語幹+介在要素+V2
줄어들다	無し	V1の連用形+V2	V1の第Ⅲ語基+V2	V1の語幹+介在要素+V2
連れ立つ(t→d)	子音交替	V1の連用形+V2	V1の語基+V2	V1の語幹+V2
반들다(d→[tt])	子音交替	V1の語幹+V2	V1の第Ⅰ語基+V2	V1の語幹+V2

前者の研究、すなわち、V1に「連用形」「語基」という用語を適用して分析する研究では、上記の表から分かるように、「介在要素有りタイプ」において介在要素が統一的に明示できないという問題がある。従って、両タイプ間で見られる音韻場所③での音韻現象の可否を適切に説明することが難しい。

のが自然である。(松本1998: 50)

もし、この指摘が正しいとすれば、(12)に挙げた「着膨(ふく)れる」「着替(か)える」などは、動詞と動詞が直接結合して作られたものではないため、本稿の考察対象としては適切ではないことになる。しかし、「着膨(ふく)れる」などの動詞が「着膨(ふく)れ」などの名詞から作られたものと考えるのが自然であるというのは、文字通り、多くの例を観察した結果、「そのように考えるのが自然である、そのように推測される」というだけのことであって、「そのように考えなければならない」ということではない。つまり、「着膨(ふく)れる」などの動詞が「着膨(ふく)れ」などの名詞から派生したということが揺ぎ無い根拠によって証明されたわけではないのだ。実際、「連れ立(だ)つ」の場合は、「連れ立(だ)ち」という名詞から派生したとは思われない。従って、日本語の「連濁現象」について考察する際に、本稿のように「ありのままの形」を重視する分析も可能であり、全く否定されるものではないだろう。

- 25) 李(2009b: 113)は、日本語の「介在要素有りタイプ」の具体例として「食ってかかる」を挙げ、音韻現象「無し」としたが、そこでの「無し」というのは、介在要素の直後では音韻現象が生じないという意味である。しかし、この点が李(2009b: 113)では明確に示されていないので、厳密には適切ではない例を挙げたことになる。本稿では「見て取る」に例を修正する。ちなみに「食ってかかる」は、「①母音添加+②母音脱落+子音交替」の音韻場所①と分析することができる。

5. まとめ

以上、本稿では、日韓語の動詞結合に見られる音韻現象について整理し、両言語とも「介在要素有りタイプ」と「介在要素無しタイプ」の間には、特定の場所で音韻現象が生じ得るかどう点において相違が見られることを指摘した。ここで言う特定の場所とは、本稿で音韻場所③と設定した所、すなわち、V2の頭子音の所に該当するが、「介在要素有りタイプ」の場合は、この場所で音韻現象が生じないのに対して、「介在要素無しタイプ」の場合は、この場所で音韻現象が生じ得る。この違いを本稿では「介在要素の直後では音韻現象が生じない」という規定で説明し、介在要素が音韻現象を阻止する一種の制約装置として機能すると解釈した。「介在要素の直後では」という表現は、介在要素が明示されているからこそ可能なものであり、介在要素を明示させるためには、V1に「語幹」という概念を適用する必要がある。言い換えれば、V1に「語幹」という概念を厳密に適用することによって、結果的に介在要素が明示でき、この結果は両タイプ間に見られる音韻現象の相違を説明する際に有効に働く、というのが本稿の主張となる。

李(2009b)では、日韓語の動詞結合を形態レベルで考察し、V1に「語幹」という概念を厳密に適用する必要があるという結論を導き出したが、この結論を本稿では音韻レベルでの考察を通してサポートしたことになる。今後、統語レベルでの考察も通して、「語幹」の導入の必要性について引き続き検証していく予定である。

【参考文献】

- 김계곤(1996) 『현대 국어의 조어법 연구』 박이정
 김승곤(2003) 『현대표준말본』 한국문화사
 신지영·차재은(2004) 『우리말 소리의 체계』 한국문화사
 이관규(2002) 『개정판 학교 문법론』 월인
 이진호(2005) 『국어 음운론 강의』 삼경문화사
 이호영(1996) 『국어음성학』 태학사
 최길시(1998) 『외국인을 위한 한국어 교육의 실제』 태학사
 李翊燮·李相億·蔡琬(2004) 『韓国語概説』 大修館書店
 市川保子(2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』 スリーエーネットワーク

- 李忠奎(2009a)「日韓語の動詞結合の対照研究—「食べる／먹다」をV2とする例を中心に—」『日本文化学報』第41輯、pp.17～38、韓国日本文化学会
- (2009b)「形態レベルからみた日韓語の動詞結合—「連用形」「語基」「語幹」を適用した形態構造分析—」『日本語文学』第43輯、pp.89～117、韓国日本語文学学会
- 井上和子・原田かつ子・阿部泰明(1999)『生成言語学入門』大修館書店
- 加藤重広(2007)「日本語の述部構造と境界性」『北海道大学文学研究科紀要』第122号、pp.97～155、北海道大学
- 菅野裕臣[著]・浜之上幸・権容璟[改訂](2007)『朝鮮語の入門』改訂版、白水社
- 工藤浩・小林賢次・真田信治・鈴木泰・田中穂積・土岐哲・仁田義雄・畠弘巳・林史典・村木新次郎・山梨正明(1993)『日本語要説』ひつじ書房
- 玉村文郎(1985)『日本語教育指導参考書13 語彙の研究と教育(下)』国立国語研究所、大蔵省印刷局
- 塚本秀樹(1993)「複合動詞と格支配—日本語と朝鮮語の対照研究」仁田義雄編『複文の研究(上)』pp.225～246、くろしお出版
- 野間秀樹(2007a)「音韻論からの接近」野間秀樹編『韓国語教育論講座第1巻』pp.257～277、くろしお出版
- (2007b)「形態音韻論からの接近」野間秀樹編『韓国語教育論講座第1巻』pp.279～329、くろしお出版
- 林巨樹・池上秋彦・安藤千鶴子(2006)『日本語文法がわかる事典』東京堂出版
- 町田健・初山洋介(1995)『よくわかる言語学入門 解説と演習』バベル・プレス
- 松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』第114号、pp.37～83、日本言語学会
- 村崎恭子(1997)「述語の構造—日本語・韓国語・アイヌ語—」『日本語と外国語との対照研究IV 日本語と朝鮮語』下巻、pp.23～54、くろしお出版
- 森田良行・村木新次郎・相沢正夫(1989)『ケーススタディ日本語の語彙』おうふう
- 山田敏弘(2007)『国語教師が知っておきたい日本語音声・音声言語』くろしお出版
- 油谷幸利(2005)『日韓対照言語学入門』白帝社

【辞典類】

『大辞泉』増補・新装版(1998) (<http://dic.yahoo.co.jp>) 小学館

『朝鮮語辞典』(1993) 小学館

『연세 한국어사전』(1998) Doosan Dong A

『표준국어대사전』(1999) (<http://stdweb2.korean.go.kr>) Doosan Dong A

www.kci.go.kr

要 旨

日本語と韓国語には、動詞と動詞の結合である「動詞結合」が豊富に存在するが、これらの例を材料にして対照研究を行う際は、①形態・②音韻・③統語・④意味の4つのレベルで総合的にアプローチする必要があると考えている。

そこで、李(2009b)は、その第一歩として、日韓語の動詞結合を形態レベルで考察し、両言語の動詞結合に関する対照研究においては、「語幹」という概念の導入が必要であるという結論を導き出した。

前稿に引き続き本稿では、日韓語の動詞結合を音韻レベルで考察する。具体的には、動詞と動詞が結合する際に生じる「音韻現象」について整理し、両言語とも「介在要素有りタイプ」と「介在要素無しタイプ」の間には、本稿で音韻場所③と設定した所、すなわち、V2の頭子音に該当する所で音韻現象が生じ得るかどうかという点において相違が見られることを指摘した。「介在要素有りタイプ」の場合は、音韻場所③で音韻現象が生じないのに対して、「介在要素無しタイプ」の場合は、音韻場所③で音韻現象が生じ得るが、この違いを本稿では「介在要素の直後では音韻現象が生じない」という規定で説明し、介在要素が音韻現象を阻止する一種の制約装置として機能すると解釈した。「介在要素の直後では」という表現は、介在要素が明示されているからこそ可能なものであり、介在要素を明示させるためには、V1に「語幹」という概念を厳密に適用する必要があるので、本稿は李(2009b)の主張を音韻レベルで裏付けたものとして位置づけられる。

キーワード：動詞結合、介在要素、語幹、音韻現象、子音交替

투 고 : 2010. 2. 28
1차 심사 : 2010. 3. 13
2차 심사 : 2010. 3. 27